

文鳥の死

昭和五十九年度 六年男児

十二月二十三日、ぼくは、沼沢君といっしょにボードゲームに熱中していた。

その日は、冬休み一日目でもあり、クリスマスも近かったので、とてもウキウキして、なんだか町中を騒ぎ回りたような気持ちでいっぱいだった。

ゲームをしながら庭の方をながめた。すると愛犬シロがかわいらしい顔をして、ぼくたちの方を見つめていた。

その時、玄関をそうじしていた母が、不安そうな声で言った。

「進、文鳥二ひきとも死んでしまったようだ。」ぼくは、「まさか、うそだろ。」と言ったが、母はなにも答えなかった。

ぼくは、本当に心配になって玄関に行くくと、文鳥は、二羽、どちらも羽を広げ、愛らしい顔を下にたおし、すでに死んでしまっていた。ぼくは、ガクっとひざをたおしカゴの戸を開けた。ふるえる手で、一羽、一羽をそっとつかみ、

カゴから出した。全身をおおっている毛は、二羽ともまだフワフワしてあたたかい。ぼくは、目の前がサーっと暗くなつていくような気がした。

ぼくは、その場をスクツと立ち、あたたかい茶の間で二羽をやわらかいティッシュペーパーでそっと包んだ。

そして、きのう、この二羽と同じように死んでしまった兄のインコといっしょに小さな箱に入れて、そっとふたをした。もう、あのかわいい顔が見られなくなると思うと悲しかった。

家のうらに三羽の墓をシャベルでほり、穴の中に両手で箱をそっとおいた。土でうめようとすると、鳥たちが羽をバタバタさせて、箱から出てきそうな感じがしてたまらなかつた。思いきってシャベルで土をかぶせた。ボサッボサッと土をかぶせるごとに悲しい気持ちが強くなり、今にもなきだしそうになった。

この二羽は、ぼくが一年生の時、ちゃんと世話をしながら責任をもつという条件で父母に買ってもらった。

鳥屋に行き、まだ毛がはえてまもない頃の元気のよさそうな手のり文鳥を二羽選んだ。そしてピー子とピー助という名前をつけてやった。

毎日、えさと水をとりかえ、時々、家の中で遊ばせてやったりして、とても可愛いがっていた。ピー子やピー助がかぜをひくことは、年に何回かあったけど、すぐに元気になって遊び回る丈夫な鳥だった。でも、さすがの鳥たちも一晩のうちにそうとう雪が積もるほどの冷えこみで、自分の体温の調整が出来なくなってしまったのだと思った。

でも思い返してみれば、文鳥二羽を本当にかわいがってちゃんとめんどうをみたのは、はじめだけで、母に、「鳥かごの下、そうじせ。」といわれてもやらなかった事もあった。飼って一年ぐらいたった頃には、ほとんど鳥たちを遊ばせてやらなかったし、ときには、水をとりかえるのを忘れる日もあった。

今度の事でも、朝、鳥たちを見た時、もうちょっと、気を配っていれば、ひよっとしたら鳥たちは、助かっていたのではないかと考えるとなんだか情けなくなってしまった。鳥たちは言葉がしゃべれないから、寒くても

「寒い。」と言えず、暑くても

「暑い。」と言えず。ぼくたちがストーブにあたりながら楽しくテレビを見て いる時も鳥たちは、玄関でただじっとしていたのだろう。

鳥たちは、この六年間、玄関のかたすみでどんな暑さにも、どんな寒さにも、じっと耐え続け、がまんして一生けんめい生き続けてきたのだと思う。

ぼくは、こんな鳥たちに、たいしてやさしくしてやれず悪かったと思う。今度、何かを飼う時は、最初から最後までめんどうを見て、死んだピー子、ピー助の分もかわいがってやりたい。今、飼っている犬「ジロ」も中途はんぱなにかいたはやめたいと思った。

ピー子、ピー助ここで仲よく永遠にねおり続けてほしいと心から思い墓の前で手を合わせた。